九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

大江匡衡 粟田障子十五連作

木戸, 裕子
九州大学大学院博士課程

https://doi.org/10.15017/10392

出版情報：文獻探究. 27, pp.9-18, 1991-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

大江匡衡　粟田障子十五連作

木戸裕子

かやうの事につけても、大納言どのはいとうらやましう女君のおはせぬ事をおぼさるべし。粟田といふ所にいみじうをかしき殿をえもいはず仕立てゝ、そこに通はせ給て、御障子の絵には名ある所々をかゝせ給ひて、さべき人〳〵に哥よませ給。

（『栄花物語』巻三さま〴〵のよろこび）

又被申者、粟田障子詩輔正卿撰之。坤元録詩維時卿。然則作者与判者各互有長短。随其功也。粟田詩以言以帥殿方人不被入之。怨言云、雖坤元録絶句一首者何不寵入哉云々。故文章博士実範後伝聞此事、不被許此書云々。

（『江談抄』巻五詩事）

右の記事のうち、『栄花物語』に見える、大納言どのこと藤原道兼の粟田山荘の障子には名所絵が描かれ和歌が付されていた。この障子は『江談抄』の粟田障子と同じものと考えられ、したがって和歌と漢詩の両方が賦されていたことになる。[注1]これは、本稿でこれから検討していく「粟田障子詩十五連作」の詩題に歌枕が含まれることからも推察される。

一つの屏風や障子に和歌と漢詩を賦す例は、例えば『古今著聞集』巻十一画図部に見える藤原能道が作らせた、上に唐絵、下に大和絵が描いてあって、それぞれに漢詩と和歌とが付けられたという和漢抄屏風がある。[注2]つまり、一つの屏風の中とはいえ、和歌には大和絵、漢詩には唐絵というふうに区別されていたのである。しかし、この粟田障子絵は先に述べたごとく大和絵のみであったらしい。したがって粟田障子詩は大和絵に賦された詩ということになる。唐絵に賦された漢詩は『経国集』の「清涼殿畫壁山水歌」以来多くの作があるが、粟田障子詩のごとき大和絵に賦された詩はこれ以前の作は残っていない。[注3]本稿では大江匡衡の家集『江吏部集』中に見える粟田障子作を検討することにより漢詩文と和歌のつながりを考えていきたい。

匡衡の粟田障子詩は現存する『江吏部集』諸本では上巻および中巻の各部に順不同で収められているが、それぞれの詩題の割注に「粟田障子十五連作中其〇〇」とあるのでそれと知られる。ただし、現存諸本では其十二とする詩に「田家秋意（音）」「初冬野猟」の二首があり、其十と其十三とが欠けているので十四首しかない。

粟田障子は『栄花物語』の記述に従えば正暦元年頃に作られたらしい。匡衡は前年の永祚元年（永延三年）正月七日に三十八歳で従五位上に叙せられ、十一月には文章博士に任じられている。それまでの匡衡は学問の家である大江氏の嫡男でありながら、天元二年二十九歳で対策に及第してからも、右衛門権尉、甲斐権守、弾正少弼とおよそ文章道とは縁の薄い官職を歴任してきた。[注4]したがって文章博士は念願の官であった。また公の席での詩作も永延元年十月の一条天皇による摂政藤原兼家邸行幸の際の応製詩「葉飛水面紅」をはじめ、このときまだ権中納言であった藤原道長邸での数度の詩会、永祚元年の大納言藤原朝光（兼家カ）の城北山荘での詩会の「夏日陪藤亜相城北山庄同賦淡交唯対水」詩序などが現存するものの、そ

れほど多くはなく、文人としての彼の活躍は正にこれからというときであった。匡衡にとって、粟田障子詩のごときまとまった数の詩を作るのは自己の力量を世に示す絶好の機会といえよう。しかも依頼主の道兼はいまだ権大納言とはいえ摂関家の一員として将来一の人となることが約束された権勢家である。匡衡が持てる技量を奮って詩作にあたったであろうことは想像に難くない。

道兼と匡衡の関係を考える資料としては、この粟田障子詩以外にあまり見られない。しかし、道兼は以前から自邸などで和歌や作文の会を催しており、匡衡が従五位上に叙せられた永祚元年二月にもおこなっている。[注5]この会に匡衡が同席していたかどうかは残念ながら不明である。が、正暦年間には、内大臣となった道兼のもとで「五月五日陪内相府池亭同賦雲峯入夏池」詩序を作っている。また、匡衡と同じく粟田障子に詩を賦している藤原為時が寛和元年道兼の粟田邸での残花の宴に同席し「遅れても咲くべき花はさきにけり身を限りとも思ひけるかな」（『後拾遺集』一〇七番）という和歌を詠んでいることを考えれば、匡衡も以前より道兼のもとに出入りしていたことはほぼ間違いなかろう。

匡衡の詩文の特徴として、執拗なまでの栄達願望の吐露、為政者や詩会の主人役に対する称賛過多などが挙げられる。[注6]これらは藤原道長関連の詩に著しく見られるが、時の権勢家の一人である藤原道兼の依頼による粟田障子詩にも、その特徴が随所に現れている。それらは漢籍を典拠とする句によって表現されており、道兼や匡衡自身を画中の人物に擬すという形をとる。しかしながら、既に先学によって指摘され、筆者自身も別稿で述べたことのある、匡衡の詩文のもう一つの特徴である強い自己卑下の句はほとんど見られない。[注7]これは、粟田障子詩の「兼道の娘誕生に備える障子に賦す」という性質上、自己卑下の言葉は忌むべきものと考えられたためではあるまいか。

以上、匡衡の粟田障子詩について略述した。しかし現存する粟田障子作は匡衡のもののみではない。前に触れたように藤原為時にも粟田障子詩と思われる詩と摘句があり、また高丘相如にも幾つかの摘句が残っている。為時は正暦元年には四十二歳、無官をかこっていた時期であったが、先に述べたように以前にも道兼の主催する宴に同席しているなどの縁でその才を買われ作者の一人に選ばれたのであろう。粟田障子作は『本朝麗藻』に完全な詩が二篇、また『和漢兼作集』『新撰朗詠集』に詩の一部と思われる摘句が数句存在する。高丘相如は残っている資料が少なく道兼との関係は不明である。ただ、『江談抄』によれば藤原公任は相如の弟子であったというから、その詩才は早くから認められていたのであろう。なお、道兼の家人として有名な藤原相如とは別人である。粟田障子詩と見られる摘句が『和漢朗詠集』や『新撰朗詠集』に数句が残っている。本稿ではこれらの詩や句も併せて挙げ、匡衡の詠じぶりを考える手掛かりとしたい。

『栄花物語』にいう、粟田障子に賦された和歌のほうは、熊本守雄氏によって『恵慶集』中の二つの歌群がそれであると報告されている。[注8]すなわち、宮内庁書陵部蔵（図書寮一五〇・五五八）本の「障子のゑにすまのうらのかたかき云々」の詞書をもつ一三四番歌から始まる六首と「或所の御屏風の哥かすか野にわかなつむ女あり」の詞書をもつ一八五番歌から始まる十三首である。前の歌群は一三六番「行すゑはもみちのもとにやとゝらしおしむにたひの日かすへぬ

べし」とほぼ同じ歌が『拾遺抄』巻三秋部一三四番歌として「二条右大臣の粟田の山庄の障子のゑに云々」の詞書を伴って収められているためそれと推察でき、後の歌群は配列順と描かれている内容が匡衡の詩とほぼ一致するので一八五番の詞書にいう「或所の御屏風」とは実は「粟田障子」のことであろうという。『拾遺抄』の詞書があるので恵慶が粟田障子の和歌作者であったのは確かであろう。しかしながら、熊本氏の説によれば匡衡の十五連作に対応する和歌は十九首である。一つの絵に対して二首以上のうたが賦されたことになる。もちろん、恵慶の和歌すべてが実際に障子の色紙型に書かれたわけではなかろうから、（これは匡衡の詩も同様である。）一首でも撰に入るように一画面につき複数の歌を詠んだことも考えられる。それでもなお、後に取り上げる第八、第十、第十一などやや疑問の残るものもある。また、熊本氏のいわれる匡衡詩と恵慶歌の対応にも第四、第八など幾つか問題があると思われる。それらについて再検討し、同時に同一画面に賦された漢詩と和歌の表現の相違を詳しく見るためにも、熊本氏の論に依拠し恵慶の和歌もその一つ一つを挙げ、改めて匡衡の詩と比較してみたい。

なお、『江吏部集』は、『新校群書類従』所収のものを底本にし、主な異同を載せておいた。使用した本は内閣文庫〔二六一一九〕本（内A）、同〔三二〇八九〕本（内B）、同〔三二三四七〕本（内C）、松平文庫本（松）、天理図書館本（天）、山口県立図書館本（山）、祐徳稲荷本（祐）、神宮文庫本（神）、賀茂別雷神社本（賀）でそれぞれ（　）内のごとく略称した。また、それぞれの詩の訓み下しは解釈のための便宜的なものであり、必ずしも平安時代の訓みにはよっていない。

本稿は第一首から第五首までを載せ、残り九首は次稿に載せる。

注1熊本守雄「粟田障子詩絵と和歌と漢詩」『恵慶集　校本と研究』
注2川口久雄「和漢朗詠集解説」『日本古典文学大系和漢朗詠集』
注3家永三郎『上代倭絵年史』
注4「中古歌仙三十六人伝」
注5『小右記』永祚元年二月三日条
注6後藤明雄「大江匡衡の詩文」『平安朝漢文学論考』
今紀子「江吏部集試論」『駒大国文』十五昭和五十三年
注7大曾根章介「大江匡衡―儒者の生涯―」『漢文学研究』第十号昭和三十七年十月
拙稿「『江吏部集』に見られる言語遊戯的表現について」『語文研究』第六十四号昭和六十二年十二月号「平安朝詩序の形式―自謙句の確立を中心として―」『語文研究』第六十九号平成二年六月
注8注1前掲書

1　春日野行　　春日野行

郊外雪銷春採菜　郊外の雪銷え春菜を採る
行人顧望日将曛　行人顧望すれば日曛れんとす
此時想得和羹事　此の時想ひ得たり和羹の事を
誰問當初傅野雲　誰か問はん当初の傅野の雲を

《校異》①菜ー荣（山・賀）　②誰ー難 ミセケチ 誰（天）
③傅ー傳（天・祐・神・松・内B）　④傅ー傳 ミセケチ 傅（内A）

《押韻》文韻（○ー平声　×ー仄声　◎ー韻字）
○××○○××　○○×○×○◎
×○××××○×　○××○××◎

《語釈》

一　春日野行　春日野は大和国の歌枕　屏風和歌の場合若菜と共に詠まれることが多い。春日野にわかなつみつゝよろづよをいはふ心は神ぞしるらん（右大将藤原定国四十賀屏風『古今集』賀歌三五六）ただし　本詩題の場合「しゅんじつやこう」と音読みし、地名の「春日野」と一般名詞としての「春の日野に行く」の二重の意味を持たせた、掛詞的表現と見るべきか。→《参考》
なお、「行」は古詩の一体の名称にもあるが、本詩は今体詩の七言絶句であるので「行」字は動詞と考えるべきである。また、我が国の漢詩文においては行の作例は少ない。（『本朝文粋』中では菅原文時の「老閑行」一篇のみ）

二　行人　旅人「行人南北分征路」（長楽坂『白氏文集』巻十八）

三　顧望　振り返って見ること「迴首曰顧」（鄭玄『毛詩箋』）

四　和羹　『書経』説命篇下「若作和羹、爾惟鹽梅。爾交修予、罔予棄。」により、政治を輔佐する名宰相を意味する。「好是銀鹽多結蘂應緣丞相欲和羹」（早春陪右丞相東斎、同賦東風粧梅　菅原道真）ここでは粟田山荘主人である藤原道兼を称える比喩となっている。と同時に、新春の子の日の風物である若菜の羹作りの意も含む。「和菜羹而啜口期気味之克調也」（扈従雲林院、不勝感歎、聊敘所観。序　菅原道真『和漢朗詠集』春部　子日所収）

五　傅野　『書経』説命篇の主人公である伝説の名宰相傅説が住んでいた傅巌の野。

《通釈》

都の外の野の雪も消えたので、新春の風物である若菜摘みをする。
道行く人が振り返って見れば、今しも夕日が沈もうとしている。
この時ふと思い出した、昔殷の高宗が傅説に対して、羹作りに準えて政治の補佐を依頼したことを。
しかし、今は、一体誰があのころのように傅巌の野の霞を分けて、隠れた賢人を探そうというのか。（その必要はない。藤原道兼こそが傅説にも劣らない名宰相として政治を補佐しておられるのだから。）

《参考》

類似の題の漢文作品として、橘在列（尊敬）の「春日野遊和漢任意序」（『本朝文粋』巻十一所収）がある。ただし、これは本文中に「嵩山之西脚　洛水之東頭（比叡山の西、鴨川の東）」とあるところから、京の都での作であり、地名としての「春日野」の意

はなく、よみは「しゅんじつやゆう」とすべきと考えられる。このときの和歌や漢詩作品は残っていない。

三恵慶集二八五

ある所の御屏風の哥　かすか野にわかなつむ女あり

かすか野ゝのもりもいかゝおもふらんおい〳〵わかなつみにきたるを

恵慶の歌にも匡衡の詩と同様若菜摘みの場面が描かれている。和歌は一首に詠みこめる情報量が漢詩よりも少ないため、匡衡の詩に比べて特に目立った表現は見えず、同一画面を詠じた作であろう。ただし、恵慶の歌が女性を詠んでいるのに対して、詩に詠じられている人物ははっきりしないが、「行人顧望すれば」というのは男性のように思われる。歌のほうも「のもりもいかがおもふらん」とある「のもり」が「行人」に対応するとすれば、障子の画面には男女両方が描かれていたことになる。

2　妹妓山下ト居　　妹妓山下に居を卜む

一従山脚卜林泉　一たび山脚従り林泉を卜むれば

塵事無侵正瀟然　塵事侵す無く正に瀟然たり

羅帳月前開鏡匣　羅の帳は月の前に鏡の匣を開き

松窓風底撫琴絃　松の窓は風の底に琴の絃を撫づ

陽臺暁夢雲相似　陽臺の暁の夢雲は相似たり

女几春心水自傳　女几の春の心水は自ら伝ふ

萬歳藤爲随手杖　万歳の藤は随手の杖為り

携持乗興弄潺湲　携へ持ち興に乗り潺湲を弄ばん

《校異》①妓ー妖（内C）　②正ー止（底本 他本ニヨリ改ム）　③帳ー張（底本 他本ニヨリ改ム）　④匣ー逕（松・内AB）　⑤底ー庭（底本・内C 他本ニヨリ改ム）　⑥雲ーナシ（天・祐）　⑦杖ー枝（松・山）枝 ミセケチ 杖（内A）　⑧乗ー來（天）東 異カ （神）

《押韻》仙韻（四句目「絃」は先韻だが、仙韻同用）

×○○×××◎　○×○○×××◎

○××○○××　○○○××○◎

○○××○○×　××○○××◎

××○○○××　○○○××○◎

《語釈》

一　妹妓山　紀伊国の歌枕。屏風和歌の作例は少なく、そのほとんどが秋の紅葉を詠む。また、川の流れとともに詠じられることも多い。ちぎりこしいもせのやまの中なれどなどかよしのゝ水もたえぬる（匡衡集 一六）

二　山脚　山のふもと。

三　林泉　山林泉石。閑居、隠遁を象徴し、白居易の詩中にもしばしば見える。「莫道両都空有宅 林泉風月是家資」（吾廬 白氏文集巻五十三）「不矜軒冕愛林泉」（令狐尚書許過弊居。先贈長句 同巻五十七）「書意詩情不偶然 苦云夢想在林泉」（以詩代書酬蔡巣尚書見寄 同巻六十九）

四　塵事　世俗の煩わしさ。俗事。塵は仏教にいう「六塵」のこと

五　瀟然　静かで安らかなこと。「瀟然無他念 虚静是吾師」（夏独直。寄蕭侍御 『白氏文集』巻五）

六　羅帳　羅はひかげのかづら。「羅 トカケ」（観智院本類聚名義抄）萬やかずらで編んだ帳。

七 鏡匣　鏡を入れる箱。月の縁で言う。月を鏡に譬えることは六朝詩から見え、我が国の詩歌にもその例は多い。「形同七子鏡 影類九秋霜」（望月詩 梁簡文帝）「金膏一滴秋風露 玉匣三更冷漢雲一」（『和漢朗詠集』秋部 十五夜 菅原文時）

八 風底　風の中「風底香飛双袖挙 月前杵怨両眉低」（『和漢朗詠集』秋部 擣衣 後中書王）

九 琴絃　松と風の縁で言う。「弾為風入松 崖谷颯已秋」（夏弾琴 隋 劉希夷）「琴の音に峰の松風かよふなりいづれのをより調べそめけむ」（『和漢朗詠集』松 斎宮女御徽女王）

十 陽台　宋玉 高唐賦「昔先王嘗游高唐怠晝寝 夢見一婦人 曰 妾巫山之女也 為高唐之客 聞君游高唐 願薦枕席 王因幸之去而辞曰 妾在巫山之陽高丘之岨 旦為朝雲暮為行雨 朝朝暮暮陽臺之下」下略」「楚の懐王が夢で巫山の神女と契った故事。

十一 女几　『山海経』第五中山経「岷山之首、曰女几之山、其上多石涅、其木多橿、其草多菊菜。洛水出焉、東注于江、其中多雄黄、其獣多虎豹」女几山は菊が多いことで有名であるが、春心と結び付く理由は不明。

十二 万歳藤　藤の杖は白詩においては閑居詩にあらわれる。「秋庭不掃携藤杖 閑踏梧桐黄葉行」（晩秋閑居『白氏文集』巻十三）又、「万歳の」と言うことにより、藤原氏の末長い繁栄を寿ぐ意味をも併せ持つ。

十三 潺湲　水の流れ。一句は「且申獨往意 乗月弄潺湲」（入華子岡是麻源第三谷 謝霊運）を利用した表現。

七、八句は画中の藤の杖にすがって歩む人物を匡衡自身に擬し、暗に藤原氏からの庇護を期待する気持ちを表す。

《通釈》

一度この山のふもとの山林泉石の地に隠遁すれば、
世俗の煩わしさに悩まされることもなく、心穏やかである。
つた、かずらで編んだ帳をかかげれば、月は匣から出した鏡のように照り輝き、
窓のそばの松を吹き渡る風は、琴を調べる音かと思われる。
この地の雲は、あの楚の懐王が陽台で夢に契った巫山の神女の化した朝の雲そのままであり、
この山に流れる水は、不老長寿の薬草たる菊を多く産するという女几山の趣を自ずと伝えている。
この地に生える万年もの間枯れることのない藤は、常に手放さず頼りにする杖となる。
私はそれを携え、気の向くままに清流を楽しむこととしよう。

《参考》

『悪慶集』一八六

いもせ山かすみたちたり
いもせやまふもとにすまぬ身なりせはうとくそみましみねのかすみを

この歌も匡衡の詩と同じく妹背山の春の景色を詠む。「ふもとにすまぬみなりせば」とあるので実際はふもとに住んでいることになり、その点でも詩題の「山下卜居」に一致し、同じ画面を詠んだものと思われる。歌中の「かすみ」は、おそらく詩中の「雲」とおなじものをさすのであろう。障子絵が大和絵である以上、当然春霞とすべきところだが、匡衡は詩全体の表現として中国風の神仙や隠遁詩を思わせる語を使っており、ここも陽臺の故事を言うために、あ

えてかすみを雲に見なしたものと思われる。

三　橋上歌馬　　橋の上馬を歌む

江山渺々幾相重　江山渺々として幾ど相重なる
暫駐行鑣岸草濃　暫く行鑣を駐むれば岸の草濃し
到此踟躕先有意　此に到りて踟躕るは先づ意有ればなり
題橋欲継馬卿蹤　橋に題して継がんとす馬卿の蹤

《校異》①山－上（底本他本ニヨリ改ム）　②渺－眇（神・松・内B）　③行－衍（内B）衍ミセケチ行（内A）　④鑣－鎌（神・松・内B）　⑤躕－躇（松・山・賀・天・祐・内ABC）　⑥卿－郷（山・祐）

《押韻》鐘韻

○××××○○◎　××○○××◎
××○○○××　××○××××○◎

《語釈》

一　渺々　かすかなさま。
二　行鑣　鑣はくつわ。
三　踟躕　ためらう。足踏みする。（踟）躕　タチヤスラフ　タチモトヲル（『観智院本類聚名義抄』）
四　題橋　前漢の司馬相如が橋柱に題して栄達するまでは再びこの橋を過ぎないと言った故事。栄達への願望を表す。「前漢司馬相如字長卿。成都人。蜀城之北七里有昇仙橋。相如題其柱曰。大丈夫不乗駟馬車不復過此橋。後遷中郎将。入蜀。郡守郊迎縣令負弩先驅。蜀人咸以爲榮」（『蒙求』相如題柱）馬卿とは司馬相如を指す。

三、四句は画中の人物を匡衡自身に擬し、栄達願望を述べる。司馬相如の故事を用いて自己の栄達願望を述べるのは匡衡の他の詩文中にも見られる。「乞巧慇懃天可許　徘徊自耻馬卿橋」（七夕守庚申同賦織女理容色応製『江吏部集』上）

《通釈》

川と山は遥かに霞みほとんど重なり合っているように見える。
橋のたもとでしばらく馬の轡を休めると、岸辺の草は色鮮やかだ。
ここで行くのをためらうのは思うことがあるからなのだ。
昔昇仙橋の柱に題して栄達を誓った司馬相如の故事に倣おうと思う。

《参考》

『恵慶集』一八七

うたゝねのはしたひ人ゆく
はしのなをなをうたゝねときく人のきくはゆめぢかうつゝなからに

恵慶の歌はうたたねの橋という地名が明記されているが匡衡の詩には特にどこの橋とも述べられていない。しかし「きくはゆめぢかうつゝながらも」という句や「橋上歌馬」という題から両作とも同じ橋のたもとに馬をとどめて立ちやすらう人を描いていると言ってよい。とはいえ、その描き方は対照的で、匡衡が橋の名に全く触れず、絵そのものの描写をしているのに対し、恵慶は「うたたねの橋」という名によって一首を「うたたね、ゆめ、うつつ」の縁語で構成しているのである。そこには情景描写はほとんどなされていない。漢詩と和歌の性質の違いがよく現れている。

四　春遊原上　　春原の上に遊ぶ

相尋勝境賞風流　勝境を相尋ね風流を賞ぶ
寄意韶光原上遊　意を韶光に寄す原の上の遊び
白鹿舊名傳得遠　白鹿の旧き名は伝へ得ること遠く
黄鸝新語聽來幽　黄鸝の新しき語は聴こえ来れど幽なり
行留草色煙侵跡　行きて草の色に留まれば煙は跡を侵し
醉倚花枝雪點頭　酔ひて花の枝に倚れば雪は頭に点ず
莫道歡娯春有限　道ふなかれ歓娯の春に限り有りと
從茲計會契千秋　茲より計会し千秋を契らん

《校異》①鹿－床（松・祐・内ＡＢ）　鸝－鶴（天）
②道－導（松）導（内ＡＢ）　計－斗（松・内ＡＢ）
《押韻》尤韻（第四句「幽」第六句「頭」は尤韻同用）

○○×××○◎　××○○○×◎
×××○○××　○○○×○○◎
○○××○○×　××○○××◎
××○○○××　○○×××○◎

《語釈》

一　韶光　春の光。「閑地心俱静　韶光眼共明」（早春独遊曲江　『白氏文集』巻十三）

二　白鹿　白鹿が現れるのは聖代の瑞兆。「白者正色。鹿者景福嘉義」（上白鹿表　晋　殷仲堪『芸文類聚』所収）ただし、ここの白鹿は「白鹿原」を指す。白鹿原は覇水のほとり。驪山の西にあたる原。白居易も何度かこの地で遊んだらしい。「独尋秋景城東去　白鹿原頭信馬行」（城東閑遊　『白氏文集』巻十三）「宴廻過御陌行　歇入僧房　白鹿原東脚　青龍寺北廊　望春花景暖　避暑竹風涼」（渭村退居。寄礼部崔侍郎翰林銭舎人詩一百韻　『白氏文集』巻十四）

三　黄　鸝うぐいす。

四　煙　かすみ、もや　一句は「霞光照後殿於火　草色晴來嫩似烟（早春　憶蘇州　寄夢得　『白氏文集』巻六十四　『和漢朗詠集』では「霞光曙後」）に拠る表現か。

五　酔倚　「倚松根摩腰千年之翠満手　折梅花插頭二月之雪落衣」（春日野遊〈和漢任意〉序　尊敬）と類似の表現。ただし、匡衡詩の場合、詩の順からいって早春の景とは考え難く、したがって、梅ではなく桜の花とした方が妥当か。

六　計会　計算して会うようにする。「今日不知誰計会　春風春水一時來（府西池　『白氏文集』巻五十八　『千載佳句』　『和漢朗詠集』にも所収）

《通釈》

景勝の地をたずね、雅な趣を楽しむ。
思いを春の光に寄せ、野原で遊ぶ。
かつて唐の白鹿原に白居易をはじめ唐土の文人たちが遊んだことも既に遠い昔のこと
今日のこの春の原では、鶯の声も微かに聞こえるだけだ。
若草の萌え出た野を行けば、霞が立ち込めて足跡を隠し、
酒に酔い花の咲いた枝にもたれかかれば、花びらは雪のように頭にふりかかる。
言ってくれるな、この喜ばしい春は限りあるものだとは。
今日の遊びを機として図りあい千歳の後までの交友を誓おう。

《参考》

『白氏文集』巻六に「秋遊原上」という類似の題があるが内容の

関連はない。

藤原為時　春遊原上（『和漢兼作集』所収）

煙霞不記誰今主　楊柳猶伝是故城

この句はおそらく三、四句、あるいは五、六句であろうと思われる。

匡衡、為時の詩句に共通するのは、かすみや煙（もや）についての言及である。栗田障子画が大和絵であることから春の絵に霞が描かれるのは当然であり、それに合わせて詩の中の霞も中国語の霞の意味（赤い光、すなわち朝焼けや夕焼け）ではなく、日本で言うかすみとして用いられていると思われる。（小島憲之「漢詩と歌の間－王朝文学史の問題－」『文学』昭和六十二年十月）（安田徳子「歌語「かすみ」成立と「霞」－四季感と色彩感に注目して－」『和漢比較文学』第五号平成元年十一月）

『恵慶集』一八八・一三七

春みかきかはらにはなみる人あり

おもふ人こさせまほしきところかなみかきかはらのはなのさかりは

せんざいあはせしたるところ

かちまけのかずにはつゆもをきつゝやはなとはなとのいろをくらぶる

熊本氏はこの二首を挙げる。しかしこれには問題があるようである。まず、前の一八八番歌だが、熊本氏も言われるように匡衡詩に「酔倚花枝一」とあるので情景としては同じ場面を詠んだものと思われる。だが、名所を山城国の「瓶原」とするのはいかがであろうか。「瓶原」は「みかのはら」であって、「みかきがはら」は大和国の「御垣原」であろう。「御垣原」はたとえば『中務集』七七番「かたをかのみかきのはらのうくひすははなちりぬとやねをばなくらん」のごとく、「鴬、花、霞」とともに詠まれることが多かったらしい。（片桐洋一『歌枕歌ことば辞典』）これは匡衡詩や恵慶の歌とも共通する。

次の一三七番歌は、春の情景とは言えまい。詞書の「せんざいあわせ」は秋の遊びである。『和漢朗詠集』でも「前栽」は上巻秋部におかれている。また、二句目の「つゆ」も秋の景物である。したがってこの歌は少なくとも、本詩と同じ画面を詠んだものではない。では、対応する秋の詩があるのかどうかは、後半の秋の景を詠じた詩の部分で考えてみたいと思う。

五　早夏観曝布泉　　早夏曝布泉を観る

閑望一條瀑布泉　閑かに望む一条の瀑布泉

眼塵暗盡坐巖邊　眼の塵暗に尽き巌の辺に坐す

穿雲倒瀉寒聲堅　雲を穿ち倒に瀉き寒き声は堅し

疑是銀河落自天　疑ふらくは是銀河の天より落つるかと

《校異》①曝－瀑（神・山・天・祐・賀）　②條－條（松・内Ｂ）　③瀑－曝（松・内ＡＢ）　④巖－岩（内ＡＢ）

《押韻》　先韻（初句「泉」は先韻同用）

○○×○×××　×○×××○

○○××○○×　○×○○××◎

《語釈》

一　眼塵　眼に映った俗欲。塵は仏教語の六塵のことで、悟りの障害となる欲望をいう。

二　暗　知らぬ間に　いつの間にか

一、二句は『白氏文集』巻五十八「秋池」に拠るか。

洗浪清風透水霜　水邊閑坐一繩牀
眼塵心垢見皆盡　不是秋池是道場

三　穿雲　三句は『菅家文草』「観瀑布水」に拠る。

銀河倒瀉落長空　恰似霜紈颺晩風
清濺寒聲圖不得　將聞二十八言中

四　疑是　四句は李白「望廬山瀑布其二」第四句に拠る。

飛流直下三千尺　疑是銀河九天落

《通釈》

心静かに一条の滝を眺めれば
眼に映った世俗の欲望はいつのまにか消え、巌の辺に座る。
流れ落ちる水は雲を穿ち、真っ逆さまに注ぎ、寒々とした音を轟かす。
全く銀河が天より流れ落ちるのかと訝しく思われる。

《参考》

『恵慶集』一八九

夏ぬのひきのたきみる人あり

なつころもすゝみかてらにたちもきむちひろさらせるぬのひきのたき

布引滝は摂津国の歌枕である。和歌に詠まれる滝の代表的なものであり、粟田障子に描かれていたのもこの滝であろう。この滝は畿内では大きな滝だったらしく匡衡詩においてもその勇壮さを表すため先行の漢詩の表現に全面的に依拠した表現を用いている。特に、第四句の李白による修辞は和歌にはほとんど見られない力強いものである。それに対して恵慶の和歌は「ぬのひき」という地名に「布を引く」という普通名詞の意味を掛け、その縁語として「ころも、裁ち、着む、千尋（ちひろ）、さらす」の語を使って一首を構成している。その点でいかにも漢詩らしい匡衡の詩と、いかにも和歌的な技巧を凝らした恵慶の和歌は好対照をなし、もしこの二首が実際に画面に書かれたとすれば見る人の興をそそったものと思われる。

――九州大学大学院博士課程――